

6) ホオズキ＝鬼灯／酸漿

ホオズキはナス科の多年草で、高さ 40～90cm、葉は長柄を持ち楕円形で縁には鋸歯がある。節ごとに 2 枚の葉を持ち、その間から枝や花を出す。花は 6～7 月頃に開き、淡黄色で中心部が緑色、花が終わると萼が大きくなって球形の果実を包む。果実は液果で熟すと朱赤色となる。ホオズキ属は世界に 100 種以上あり、日本では大実のタンバホオズキが、鉢植えなどにしてよく栽培されている。この他にも背丈の低いサンズンホオズキ、果実が穂状に垂れ下がるヨウラクホオズキなどの種類がある。また熱帯アメリカには果実が緑色のセンナリホオズキ、ヨーロッパにはヨウシュホウズキ、北アメリカには食用になるシヨクヨウホウズキもある。和名の由来は「頬付き」で果実の中身を出して、からになった皮を口に含んで鳴らして遊ぶ様子からこの名前になったとか、茎にホホというカメムシの仲間がよく付くためとか、ホは火でツキは染まる意味で、真赤になる果実によるものとか諸説がある。別称はカガチ、アカカガチ、ヌカズキ、ホンズキ、トウロウグサ(灯籠草)などが主なものである。学名は『*Physalis alkekengi*』で、属名は膀胱の意味。種小辞はホオズキのアラビア名による。イギリスでは『Japanese lantern plant』、もしくは『winter cherry』である。中国では『酸漿』(サンショウ)といわれており、漢代の『爾雅』(ジガ)にはすでにその名前が見える。また『神農本草経』(シンノウホンゾウキョウ)を初めとする本草書には、根を乾燥させたものを『酸漿根』(サンショウコン)といい、咳止め、利尿、解熱薬としたことが記されている。昔は妊娠中絶の薬とされ、江戸時代には果実を塩漬けにして保存食としたり、葉はゆでて食用にもしていた。

ホオズキは『古事記』には『アカカガチ』の名で現れ、八岐大蛇の目に例えられている。平安時代にはホオツキといわれ、『倭名類聚鈔』(ワミョウルイジュショウ)にも記述がある。一方『本草和名』(ホンゾウワミョウ)の中では、「酸漿、和名は保保都岐(ホズキ)、一名奴加都岐(ヌカチ)」と記述され、『源氏物語』の「野分」には、「いとをかしき、色あひつらつきなり。ほおつきなどいふめるやうに、ふくらかにて」と記されている。

『枕草子』の「大きにてよきもの」(216 段)には、

おほきにてよき物家。餌袋(ヱヅク)。法師。果物。牛。松の木。硯の墨。

男(オノ)の目の細きは女びたり。又金椀(カマリ)のやうならんもおそろし。火桶。

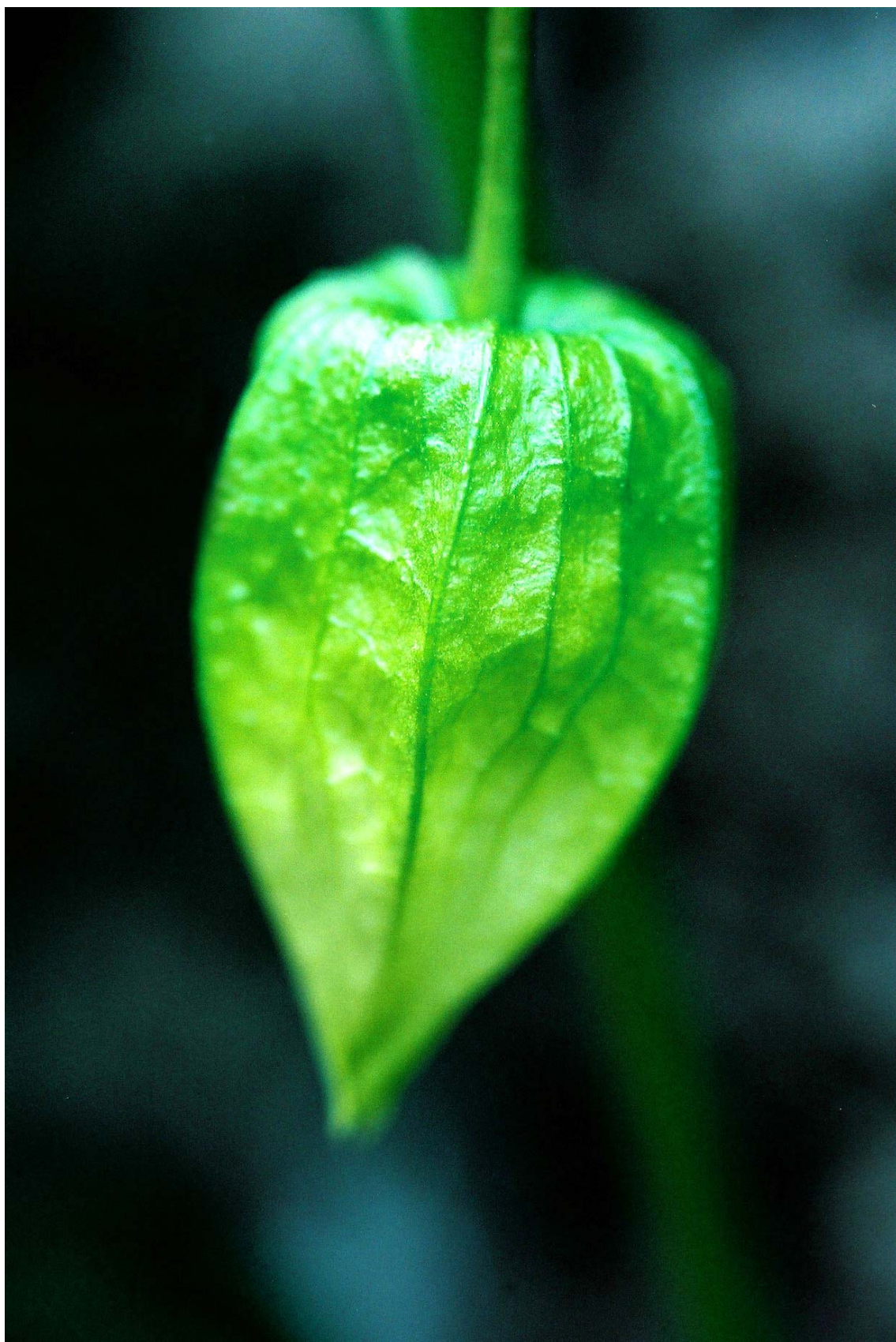
酸漿。山吹の花。桜のはなびら。

と記されている。また『栄花物語』には「御色白く麗しう、ほおずきなどを吹きふくらめて据ゑたらんやうにぞ見えさせ給」と描写され、すでに子供たちが口に含んで遊んでいたことを、うかがい知ることができる。

ホオズキは日本では盂蘭盆や七夕に、先祖の霊を迎える花として供えられたが、ヨーロッパでは、クリスマスや新年の飾りとして用いられていた。『酸漿市』は浅草観音の縁日に開かれ、七月十日に参詣すれば四万六千日分の効果があるといわれた。



ホオズキの花はナス科だけあって、白ナスの花によく似ている。



ホウズキの若い果実。



赤く熟した果実を口に含んで遊んだ時から、何年経ったろうか。独特の味だった。

[目次に戻る](#)